Japan Foundation for
Regional Art-Activities

地域創造レター

News Letter to Arts Crew

4月号—No.371
2026.3.25
（毎月1回25日発行）

【み空色】明るく澄んだ空のような薄い青。

空に由来する色名には空色、天色（あまいろ）、真空色、空天色などがある。み空の「み（御）」は、「み山」「み雪」などと同じく尊いものへの敬意を込めた美称。ちなみに俳句で御空は秋の季語、元旦の朝の清々しい空を指す初御空は正月の季語。

●目次／*contents*

今月のニュース……2
ステージラボ高知セッション報告
令和7年度「美術館出前（オーダーメイド）型ゼミ」開催報告
財団からのお知らせ……6
ステージラボ鶴岡セッション参加者募集／令和7年度「公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）」報告／令和7年度「公共ホール邦楽活性化事業」報告／令和7年度「公共ホール現代ダンス活性化事業（ダン活）」報告／令和7年度「リージョナルシアター事業」報告
今月の情報……9
地域通信
今月のレポート……12
滋賀県東近江市　東近江創作ミュージカル2025
『木地師のふるさと東近江～惟喬親王伝説～』

発行元：一般財団法人地域創造
〒107-0052 東京都港区赤坂2-9-11
オリックス赤坂2丁目ビル 9F
Tel. 03-5573-4093　Fax. 03-5573-4060
URL: https://www.jafra.or.jp/

●ステージラボ高知セッション

多彩なゼミを開催し、若い受講生も多く参加

ステージラボ高知セッション報告

2026年2月24日～27日

写真

1：ホール入門コースの最終日発表会

2：自主事業コース「世界の見え方が変わる?！アートスペース画楽&リベルテによるパレード的街歩き」

3：共通プログラム「地域から発信する創造事業」（写真中央が講師の細川貴司さん）

4：公立ホール・劇場マネージャーコースの倉田翠さんワークショップ「共感できることを探す」

●コースコーディネーター
◎ホール入門コース
有門正太郎（演出家・俳優・劇作家、有門正太郎プレゼンツ主宰）
◎自主事業コース
荒井洋文（犀の角代表、プロデューサー、舞台芸術制作者）
◎公立ホール・劇場マネージャーコース
山本麻友美（京都芸術センター副館長・チーフプログラムディレクター）

●ステージラボに関する問い合わせ
芸術環境部　児島
Tel. 03-5573-4183

＊次回のステージラボは、2026年7月に山形県鶴岡市の荘銀タクト鶴岡（鶴岡市文化会館）で開催します。詳細・申し込み方法はP6をご参照ください。

ステージラボ高知セッションが2月24日から27日まで高知市文化プラザかるぽーとを会場に開催されました。かるぽーとは大・小ホール（1,085席、200席）や市民ギャラリー、横山隆一記念まんが館、中央公民館を有する複合文化施設です（2002年開館）。今回のラボでは、「入門コース」「自主事業コース」「公立ホール・劇場マネージャーコース」が開講されました。

●視点を変えて楽しむ～ホール入門コース

ホール入門コースのコーディネーターは、地域創造のリージョナルシアター事業派遣アーティストの有門正太郎さんです。今回は入職1年未満の参加者が多く、緊張気味にスタートしました。

2日目のゼミでは、子ども食堂などでのアートワークショップ実施のための仕組みをつくるNPO法人CASK代表の山内泰さんがレクチャー。「素晴らしい価値」を届けるのではなく、「当たり前とされている社会規範を問い直し、その場にいる誰もが共に価値の担い手になれる手法やあり方を創造する」という文化芸術の社会モデル的なアプローチについて学びました。

それを踏まえ、「僕は誰でも参加できるものを信じたい」という有門さんは、参加者とかるぽーと周辺で視点を変えて不思議スポットを探す街歩きに出発しました。4グループに分かれ、ひとり1カ所の不思議スポットを撮影して説明文を創作し、それらを集めたガイドブック『高知の“ゆるい”歩き方』を作成。最終日には冊子の出版披露イベントを企画し、スポットを紹介する寸劇を披露しました。

また、普段は聞きたくても聞けないことをシェアする「もやもや会議」も行われ、「思っていることが言えるようになった」など、それぞれに変化を感じた4日間となりました。

●地域との協働を考える～自主事業コース

自主事業コースのコーディネーターは、上田市で民間の小劇場を運営している荒井洋文さんです。静岡県舞台芸術センター（SPAC）制作部に10年間在籍後、地元に戻り、商店街の空きビルを借り受けて、カフェ兼シアターやゲストハウス、スタジオを有する「犀の角」を立ち上げ。コロナ禍を契機に、まちづくり系のNPOや地域の団体と連携し、地域の居場所・共有地となる「のきした」をスタートしました。

今回のコースでは、「劇場と地域の間に生まれるもの」をテーマに荒井さんの取り組みを学ぶとともに、上田市のNPO法人リベルテと高知市のアートセンター画楽の協力により、障害

のある人たちと一緒に街を歩いて、福祉施設と地域の境界線を拓くパレードを体験しました。

また、京都の演劇人の拠点となってきた民間の小劇場・アトリエ劇研(2017年閉館)のプロデューサーなどを経て、現在は市民活動を支援する「いきいき市民活動センター」の指定管理を担うNPO法人劇研理事長の杉山準さんからもお話を伺いました。杉山さんは、「私たちが指定管理者になったことで、音楽や演劇、ダンスなどの利用者が増加し、交流も活発に。また、お祭りを復活したことでまちづくりの機運も高まった。創造的な市民が育ち、柔軟なアイデアを育むことで街は良くなる」と話していました。

●共感することから始める～公立ホール・劇場マネージャーコース

公立ホール・劇場マネージャーコースのコーディネーターは、25年前に京都芸術センターに入職し、現在は副館長兼チーフプログラムディレクターを務める山本麻友美さんです。「管理職は創造的な現場に関わりながら、立場の異なる人の間で理想だけではすまない調整を求められる」という山本さんは、参加者がお互いの相談相手になれる関係づくりをテーマに掲げてカリキュラムを展開しました。

特徴的だったのが、コンテンポラリーダンスのアーティストで、昨年からまつもと市民芸術館芸術監督団に参画している倉田翠さんによるワークショップです。倉田さんは、ダンサーや俳優だけでなく、市民、薬物依存回復施設の人、認知症の人、刑務所の受刑者など多様な人々と向き合って創作しています。

「表層的なコミュニケーションの問題でぶつかっていることも多い。自分ではない他者を完全に理解することは不可能だと考えているが、想像すること、自分のことのように話を聞くことで、他者と創作してきた。その一端をみなさんと体験できれば」と語りかけ、4時間にわたる「共感できることを探す」ワークを行いました。

前半は、参加者の「泣く、ムカつく、喜ぶ」など感情が大きく動いた時の話にみんなで耳を傾けました。後半は、倉田さんが共感した身体の声(表現)を「交渉する人」「お土産を買う人」「身体を鍛える人」として参加者が即興的にパフォーマンス。すると、まるで1本の作品のように「ホールマネージャーの日々」が浮かび上がってきました。

また、杉山さんと京都市文化市民局文化芸術都市推進室担当部長の松本守弘さんも講義されました。松本さんは、京都市役所で労務担当を中心に従事した後、文化部門でコロナ禍における芸術文化支援、京セラ美術館の運営体制の見直しなどを行ってきました。「京都芸術センターの報酬の見直しも行い、現在は市職員に準拠した給与水準にできるよう検討している。市役所は現場の状況を知らないので、待遇改善にしてもきちんと声を上げる必要がある」との言葉に、参加者は大きくうなずいていました。

●

共通プログラムでは、「地域から発信する創造事業」として高知市文化振興事業団が制作した市民参加劇『12人の怒れる土佐人』(レジナルド・ローズ作の法廷劇を土佐弁に翻訳)について学びました。企画・演出を担当した高知出身の細川貴司さんが市民と創作するときに行うゲームなど、事業の一端を体験しました。

ステージラボ高知セッション プログラム表

	ホール入門コース	自主事業コース	公立ホール・劇場マネージャーコース
2月24日	開講式／オリエンテーション		
	「イントロダクション」 有門正太郎	「はじめまして。自分を開いて、お互いを知る。」 荒井洋文、伊藤茶色	「はじめの会」 山本麻友美
		「街に集まりの場、あるいは余白をつくる」 荒井洋文	
	全体交流会		
25日	「社会モデルと文化芸術～リテラシーからコンピテンシーへ」 山内泰	「劇場・福祉・支援の捉え直しの取り組み」 武捨和貴、元島生、荒井洋文	「共感できることを探す①」 倉田翠
	「視点を変える 面白がる」 有門正太郎、中尾真奈美	「世界の見え方が変わる?! アートスペース画楽＆リベルテによるパレード的街歩き」 上田祐嗣、武捨和貴、伊藤茶色	「共感できることを探す②」 倉田翠
	「変えた視点で 街を面白がる」 有門正太郎	「グループワーク 街歩きの振り返り」 上田祐嗣、武捨和貴、伊藤茶色、荒井洋文	「地域課題と文化施設、その可能性」 杉山準
	共通プログラム「地域から発信する創造事業」 細川貴司		
26日	「デザイナーと作る『こ・う・ち』」 (このまちで うまれた ちいさな記録) 中尾真奈美、有門正太郎	「SPACのしずおかの街とつながる試みの変遷」 成島洋子	「行政との関係づくり」 松本守弘、山本麻友美
			修了式
	「劇場を知る」 有門正太郎	「公共劇場／施設と民間の連携について」 津村卓、杉山準、荒井洋文	
	「モヤモヤ会議」 有門正太郎	「グループワーク 課題解決に向けて、何ができるか考える。」 荒井洋文	
	「『こ・う・ち』発表会イベント作成」 有門正太郎	「まとめと共有」 荒井洋文	
27日	「ずっともへ」 有門正太郎	「ふりかえり」 荒井洋文	
	修了式		

●令和7年度「美術館出前（オーダーメイド）型ゼミ」

奈良県ではインクルーシブな館の在り方を考える研修を実施

令和7年度
美術館出前（オーダーメイド）型ゼミ

写真（奈良県立美術館での第1回研修会の様子）
左：岡部太郎さん（たんぽぽの家）の講義
右：ワークショップでアイマスクを装着して作品に触れる体験をする受講生

この事業では、美術館のマネジメントに関する研修会を、地域創造と申請館の共催で2年間にわたって実施しています。研修テーマを申請館が希望する内容に沿って組み立てる「オーダーメイド型」であることが特徴です。また、県域や地域の美術館等と共に研修を受けることで相互交流の場とすることを目指しています。講師の謝金や旅費は地域創造で負担するため、申請館は講師選定や参加者募集、会場準備を行うのみという負担の少なさも魅力のひとつです。

今年度は、福岡県にある田川市美術館、鹿児島県にある鹿児島市立美術館でそれぞれ1回、奈良県立美術館では2回のゼミを開催しました。

近年、インクルーシブな公立美術館の在り方についての研修を希望する公立美術館が増えていると感じています。国際博物館会議（ICOM）の2022年プラハ大会にて新たな博物館の定義案が採択され、これまでも基本とされてきた研究・収集・保存・展示に加え、誰もが利用できるコミュニケーションの場としての役割が明記されたことにより、その具体的な方法を模索している公立美術館は少なくないと思います。また、障害者差別解消法が2024年4月に改訂され、合理的配慮の提供が義務化されたことも受け、より多様な来館者のニーズに応える必要性が出てきており、「そもそも公立美術館として何をすべきか」を根本から考えたいと思っている美術館関係者も多いようです。

今回は、そうした公立美術館の方々にも参考になるよう、令和7年度に実施したなかでも奈良県立美術館と共催して行った1回目の研修を取り上げたいと思います。奈良県立美術館では、令和6年度よりリニューアルに向けた検討が始まっているということで、「芸術文化における共生社会の実現に向けた、多様な来館者に対して開かれた公立美術館の活動の在り方について学びたい」というご要望があり、令和7・8年度事業として採択となりました。

1回目の研修は、8月8日に午前と午後との2部制で実施しました。奈良県立美術館からお声がけをいただき、県内の公立美術館を中心に、県の文化振興課や障害福祉課、近隣の教育機関の方々などにもご参加いただきました。午前中は、奈良県で「アート」と「ケア」の視点から、多彩なアートプロジェクトを実施している一般財団法人たんぽぽの家理事長の岡部太郎さんに、その活動をご紹介いただきました。講義のみの午前については、オンラインでの参加も併用することで、遠方の施設の方や業務都合がある方も参加しやすい工夫をしました。

まずは、障がい者とアートをめぐる1980年代以降のトピックスを包括的に紹介され、たんぽぽの家が運営するアートセンターHANAに所属するアーティストの活躍ぶりや、企業や美術館、自治体との連携の事例も具体的にお話しいただき、参加者の皆さんは熱心に聞き入っていました。また、障がい者の文化芸術活動を支える法整備や環境が少しずつ整ってきた現状を踏まえ、次のステップとして「いかに地域の文化施設と繋がっていくか」が重要であるという話を伺い、公立美術館が多角的に連携し、

●美術館出前（オーダーメイド）型ゼミに関する問い合わせ
総務部　高野
Tel. 03-5573-4056

地域づくりの核となっていく必要性を感じる時間となりました。

午後は、視覚に障がいのある方と晴眼者との交流を基軸とした活動を展開している一般社団法人メノキから全盲の彫刻家・三輪途道（みちよ）さんと福西敏宏さん、株式会社ジンズ地域共生事業部の秋本真由美さんを講師に迎え、触察による作品鑑賞を実践するワークショップを行いました。

メノキは、視力を失った三輪さんの視点を尊重しながら、障がいの有無にかかわらず、すべての人が美術の鑑賞および創作を楽しむことのできる社会の実現を目指し、触察による鑑賞を活動の中心に据えています。またメノキとジンズでは「ミルミルつながるプロジェクト」として、群馬県人なら誰もが知る上毛かるたを題材につくられた《みんなとつながる上毛かるた》で、五感を使ったコミュニケーションを通し、お互いの世界を拡げる活動に取り組んでいます。

今回の研修では、三輪さんの作品である《みんなとつながる上毛かるた》と《かべとじめん》の触察板に直接触りながら、“触れる”ことを通じた美術鑑賞の新たな可能性について学び考える機会としました。4、5人ずつのグループに分かれながら、アイマスクを着けた状態で作品を受け取り、触ることでどんなものが描かれているのかを想像します。グループ内ではアイマスクを着けないアテンド役をつくり、各々のイメージを言葉で紡ぎあいながら想像力を膨らませていきます。

最後に三輪さんから、「見えない人への解説には、ただ一つの正解を求めないことが重要で、自分がどう感じたが、コミュニケーションする言葉が大切だ」というお話しを伺いました。見えない人の鑑賞のための触れる素材があったとしても、ただあるだけではダメで、それを触りながらアテンドの方に説明してもらわないと見えない人たちにとっても理解することは難しいそうです。美術館の作品説明は、想像力を限定しないよう客観的になりがちですが、見えない人にはもう一歩踏み込んで、アテンドの方の気持ちや感動が入った言葉での説明があると、三輪さんとしてはうれしいとのこと。そういった説明のための言葉や、鑑賞を深めるための言葉も、ただ一つの正解があるわけではなく、個性の異なるさまざまな鑑賞者とアテンドの方のその都度の工夫で、一緒に鑑賞をつくり上げていくような体験を美術館でつくれないかと、さまざまな取り組みをしているそうです。

例えば視覚障がいだけで考えても、全盲なのか少し見えるのか、生まれつきなのか後天的なものなのかなど、人によってグラデーションがあり、相手とコミュニケーションをとって個別に対応していく必要性、そして、障がいのある方からの要望があれば、完璧な対応ができないからやらないのではなく、できることから対応していくことが大切なのだと痛感した研修となりました。

終了後のアンケートでは、参加者からも「ただやみくもに障がい者向けコンテンツをつくるのではなく、何が必要なのかを理解した上で用意することが大事」「文化施設として何を意識すべきかを共有できた」といった声がありました。

奈良県立美術館では、引き続きインクルーシブな公立美術館の在り方についての学びを継続する予定です。2回目（3月12日）の研修では、一般社団法人アーツアライブ代表理事の林容子さんをお招きし、アートが医療や福祉の現場にもたらす効果や海外の最新情報を「ミュージアムにおける文化的処方」と題してご講義いただいたのち、グループワークで参加者同士も意見交換をしました。翌日の13日には、アーツアライブが実践する、認知症とその家族を対象とした対話型鑑賞プログラム「アートリップ」の実演を見学・サポートすることを通して「文化的処方」の実践を学びました。

●

このように美術館出前（オーダーメイド）型ゼミでは、地域の特色や現在抱えている課題に沿って研修事業を行っています。昨年から募集時期が少し変わり、7月末から10月末にかけて募集をしていますので、ご興味のある館はぜひご検討ください。

●令和7年度「美術館出前（オーダーメイド）型ゼミ」
◎田川市美術館
※第1回、第2回は令和6年度に実施
•第3回研修会（2025年7月30日）
テーマ：多様化するキュレーターの役割——地域、連携、表現の可能性
内容：地域に根ざしながらも独自性あふれる企画を実践してきた講師を招き、地方の公立美術館としての役割を柔軟に捉え直し、地域社会にとってより魅力的な存在となるための手がかりを得る機会とした。
講師：山口洋三（インディペンデント・キュレーター）、山下弘子（坂本善三美術館学芸員）
◎鹿児島市立美術館
※第1回、第2回は令和6年度に実施
•第3回研修会（2025年6月24日）
テーマ：美術館にまつわる法律の話
内容：著作権や著作人格権、展示権など、知っているようできちんと知らない美術館に関係する法律についてわかりやすく講義いただいた後、各館の実例に基づいた日頃の疑問を事前に取りまとめて質問できる時間を設けた。
講師：木村剛大（弁護士）
◎奈良県立美術館
•第1回研修会（2025年8月8日）
テーマ：障がい者の芸術文化活動の現在
講師：岡部太郎（一般財団法人たんぽぽの家理事長）
ワークショップ「ことばで触れる、かたちの世界—手で鑑賞するワークショップ—」
講師：三輪途道（彫刻家、一般社団法人メノキ代表理事）、福西敏宏（同副代表理事）、秋本真由美（株式会社ジンズ地域共生事業部）
•第2回研修会（2026年3月12日、13日）
テーマ：ミュージアムにおける文化的処方
講師：林容子（一般社団法人アーツアライブ代表理事）

財団からのお知らせ

●ステージラボ鶴岡セッション参加者募集

ステージラボは、公立文化施設等の職員を対象に、ワークショップ等の体験型プログラムやグループディスカッションなど、講師と参加者の双方向コミュニケーションを重視したカリキュラムに取り組む、少人数ゼミ形式の実践的な研修事業です。

令和8年度の前期セッションは、山形県鶴岡市の荘銀タクト鶴岡(鶴岡市文化会館)にて2コースを開催します。各コースの詳細は募集要領をご覧ください。皆様のご参加をお待ちしています。

募集締切:2026年4月24日(金)必着

●ステージラボ鶴岡セッション概要

[日程]2026年7月7日(火)～10日(金)
[会場]荘銀タクト鶴岡(鶴岡市文化会館)
(山形県鶴岡市馬場町11-61)
[開講コース]ホール入門コース、自主事業コース
[定員]各コース20名程度
[主催]一般財団法人地域創造
[共催]タクトつるおか共同企業体、鶴岡市教育委員会
[後援]鶴岡市、山形県

◎ホール入門コース

【コーディネーター】
セレノグラフィカ(隅地茉歩[振付家・ダンサー]、阿比留修一[ダンサー])
【対象となる職員の目安】
公立文化施設で企画・運営に携わる職員および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体職員で、公共ホール・劇場において業務経験年数1年半未満の方。
【コース概要】
現在の皆さんの新鮮な目で、人と人とが出会う現場を体験してみましょう。ワークショップに参加したら、参加する前の自分と何が変わるでしょうか。また、皆さんの新鮮な耳で、劇場に関わる先輩たちの興味深い経験談を聞いてみましょう。どんな話なら迷ったり悩んだりした時に思い出せるでしょうか。今回の4日間のプログラムから、ぜひ劇場で働くことの魅力、できれば醍醐味を見つけてください。ご自分のその身体と感覚で。

◎自主事業コース

【コーディネーター】
田澤拓朗(サントミューゼ[上田市交流文化芸術センター]事業担当係長)
【対象となる職員の目安】
公立文化施設で企画・運営に携わる職員および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体職員で、自主企画による事業を実施している公共ホール・劇場において業務経験年数が2～3年程度の方。
【コース概要】
みなさんのホールが抱える課題にも向き合いながら、集客や採算といった短期的な数値だけに一喜一憂するのではなく、地域のホールとして独自の存在意義を持ち続けていくためにはどうしたら良いか、他館の事例や評価手法について触れながらその方策を考えます。また、ワークショップ体験やアーティストとの対話などを通して、自分自身の内面に起こる変化を感じる機会になればと思います。

◎荘銀タクト鶴岡(鶴岡市文化会館)

日本海と朝日連峰の山々に囲まれた山形県鶴岡市の中心部に位置する荘銀タクト鶴岡(鶴岡市文化会館)は、約40年間にわたって市民に親しまれてきた旧文化会館の老朽化による建替えという形で2018年3月に開館しました。

設計はSANAAの妹島和世氏によるもので、山並みを感じさせる外観や東北では珍しいワインヤード型の客席を有した大ホール、回廊型のエントランスホールなど特徴的なデザインながらも、誰でも気軽に入れる公園のような雰囲気で催事のない日でもフリースペースには多くの人が訪れています。

指定管理者としてタクトつるおか共同企業体が管理運営を担い、鶴岡の文化芸術が集う場所を目指し、活動・育成・創造・鑑賞・発信・交流の拠点として幅広く自主事業を展開しています。2024年度には心豊かな地域づくりに貢献している点が評価され、地域創造大賞(総務大臣賞)を受賞。今後も市民が主体的に関わる協働事業や建築の特徴を活かした事業など、地域への文化的貢献を念頭に置きながら魅力あふれる取り組みを積極的に展開していきます。

●ステージラボ鶴岡セッション参加申し込み方法
当財団ホームページより募集要領をご確認の上、必要事項を揃えて専用フォームよりお申し込みください。
https://www.jafra.or.jp/project/training/01.html#boshu

●ステージラボに関する問い合わせ
芸術環境部　児島
Tel. 03-5573-4183

●令和7年度「公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）」報告

地域創造が市町村等と共催し、クラシック音楽の地域交流プログラム（アクティビティ）とホールでのコンサートを実施する「公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）」。令和7年度は10地域で事業を実施しましたが、その中から2地域を紹介します。

山形県大石田町では、ユーフォニアムの山崎由貴さんとバス・バリトンの小野寺光さんという珍しい組み合わせで「ふるさと」をテーマとした事業を企画しました。アクティビティ先の大石田中学校では中学2年生を対象とし、音楽とともに山崎さん、小野寺さんそれぞれの人生や夢についての話を交え、これから進路を選択していく生徒たちに向けた応援のメッセージが届けられました。コンサートでは、敷居の高いクラシック音楽を身近に感じてもらうため、大石田の懐かしさや美しさを感じられる写真をプロジェクターに投影した音楽とのコラボレーションを実施。コンサートのラストでは、町の合唱団と一緒に『ふるさと』を演奏し、会場は温かな雰囲気に包まれました。

三重県鈴鹿市ではブラジル人コミュニティにリーチしたいという担当者の想いから、ブラジル人学校に通う高校生に向けたアクティビティを実施しました。チェロの北垣彩さんは、自身が楽器を始めた時に使用していた子ども用のチェロを持参し、生徒たちが楽器に触って振動を体感できるプログラムを企画。言葉が違っても音楽を通じて繋がれることを実感できる事業となりました。「世界の音楽」をテーマとしたコンサートには、ブラジル人学校の生徒たちも来場し、さまざまなコミュニティの方がチェロの美しい音色に耳を傾けていました。

令和8年度の公共ホール音楽活性化事業は12地域で実施予定です。登録アーティストやコーディネーターと共に、地域のニーズに沿った多様なプログラムを展開することで、ホールやその地域にとって新たな取り組みにも繋がることを目指して実施してまいります。

大石田町町民交流センター 虹のプラザでのコンサートの様子

●令和7年度「公共ホール邦楽活性化事業」報告

今年度は3組の演奏家が6地域で事業を実施しました。移住者が例年増え続けている人口9万人の長崎県大村市では、主に子ども向けにアウトリーチを行いました。萱瀬中学校、こども未来館おむらんど、教育支援施設あおば教室の3カ所を演奏家の安嶋三保子さん（箏、十七絃）、笠原道樹さん（尺八）と共に訪れました。

アウトリーチを行う場所を広げていきたいという担当者の思いもあり、今回、特に挑戦的な試みとなったのが、小学4年生から中学生までの学校へ行けない子どもたちが通うあおば教室でした。教室となっている建物は江戸時代から残る立派な日本家屋で、綺麗に手入れされた庭園もあり、まさに箏と尺八の演奏にふさわしい雰囲気のある場所でした。聞き馴染みのある箏独奏『さくらさくら』から始まり、子どもたちの興味関心を引きました。尺八のさまざまな技が散りばめられている『鶴の巣籠』では、音色を楽しむとともに演奏法を知る機会になりました。また、あおば教室の目の前には大村湾があり、「琴の海」とも呼ばれていることにちなみ『春の海』を演奏。穏やかな海を思い浮かべながら聴いてもらいました。

ホールプログラムでは、シーハットおおむらの大会議室に特設ステージを設営、公演の前後には箏の演奏体験コーナーを設けるなど、邦楽を身近に感じてもらうために工夫を凝らしました。また、アウトリーチの様子が長崎新聞と西日本新聞に取り上げられたこともあり、当日券の販売枚数が40枚を超え、192人もの来場者が訪れて満員御礼となりました。

あおば教室でのアウトリーチ

●令和7年度「公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）」実施団体／派遣アーティスト
- 宮城県登米市（山崎由貴）
- 山形県大石田町（山崎由貴、小野寺光）
- 福井県おおい町（小野寺光）
- 岐阜県高山市（山崎由貴）
- 静岡県藤枝市（三原未紗子）
- 愛知県阿久比町（小野寺光）
- 三重県鈴鹿市（北垣彩）
- 佐賀県嬉野市（小野寺光）
- 鹿児島県知名町（北垣彩、山崎由貴）
- 沖縄県宮古島市（山崎由貴）

◎問い合わせ
芸術環境部　おんかつ担当
Tel. 03-5573-4168

●令和7年度「公共ホール邦楽活性化事業」実施団体／派遣演奏家
- 石川県かほく市（安嶋三保子）
- 滋賀県東近江市（森梓紗）
- 島根県安来市（森梓紗）
- 佐賀県佐賀市（安嶋三保子）
- 長崎県大村市（安嶋三保子）
- 宮崎県門川町（大萩康喜）

◎問い合わせ
芸術環境部　邦楽担当
Tel. 03-5573-4143

●令和7年度「公共ホール現代ダンス活性化事業」実施団体／派遣アーティスト
[Aプログラム] 福島県いわき市(浅井信好)、神奈川県座間市(橋本真那)、島根県安来市(康本雅子)、熊本県宇土市(岩渕貞太)、熊本県天草市(Von・noズ)、宮崎県都城市(康本雅子)、
•Bプログラム
千葉県市川市(井田亜彩実)
•Cプログラム
茨城県日立市(黒須育海)、静岡県菊川市(井田亜彩実)、京都府(浅井信好)、沖縄県名護市(黒須育海)
◎問い合わせ
芸術環境部　ダンス担当
Tel. 03-5573-4075

●令和7年度「リージョナルシアター事業」
◎実施団体／派遣アーティスト
岩手県釜石市(樋口ミユ)、宮城県仙台市(福田修志)、東京都国立市(越智良江)、三重県鈴鹿市(田上豊)、大阪府箕面市(有門正太郎)、兵庫県伊丹市(志賀亮史)
◎アドバイザー兼派遣アーティスト
多田淳之介(演出家、東京デスロック主宰)、田上豊(劇作家・演出家、田上パル主宰)
◎アドバイザー
内藤裕敬(劇作家・演出家、南河内万歳一座座長)、岩崎正裕(劇作家・演出家、劇団太陽族代表)
◎問い合わせ
芸術環境部　演劇担当
Tel. 03-5573-4124

●令和7年度「公共ホール現代ダンス活性化事業(ダン活)」報告

コンテンポラリーダンスのアーティストと公共ホールが共同で地域やホールの特性を生かした企画を実施するダン活。今年度は、A：地域交流プログラムを6地域、B：市民参加作品創作・公演プログラムを1地域、C：公演プログラムを4地域の計11地域で実施しました。

Aプログラムを実施した福島県いわき市では、中心部の小学4年生と沿岸部の小学校の特別支援学級を対象に、浅井信好さんによるアウトリーチを各校2回ずつ実施しました。2回の実施を通して内容を発展させ、体験をより深めることができました。ワークでは、子どもたちが他者や周囲の環境に意識を向けるとともに、自由な発想で取り組む姿が見られました。また、学生を対象とした公募ワークショップでは、詩人・谷川俊太郎さんからいわき芸術文化交流館アリオスに贈られた組詩を用い、言葉が心や身体に及ぼす影響を自身の感覚を通して探っていきました。最後に短い作品を創作・発表し、参加者からは「感覚から自然と身体が動くのを感じた」との声が聞かれました。

千葉県市川市は令和5年度からダン活に取り組み、3年間の集大成となるBプログラムでは井田亜彩実さんの『ARTopia!!!』を創作・上演しました。公募で集まった市民に加え、市川市文化会館のアーティストバンクに登録しているアーティスト等にも声をかけ、計12名＋1施設が、ダンスや音楽、美術、映像など多岐にわたる形で「アートの祭典」を盛り上げました。また、開場中には施設内各所で即興パフォーマンスが繰り広げられたほか、公演の中盤にはホワイエでダンスと音楽のセッションが始まるなど、一部回遊型で行われました。振り返りの中で文化会館の田所久仁子さんと髙山優希さんは、「たくさんのアーティストに携わっていただき、初の回遊型にも挑戦して、今後の可能性が広がった。引き続きダンス事業を継続していきたい」と話していました。

ダン活では実施団体が地域のニーズを探りながら、ダンスを通じた地域活性化に取り組んでいます。令和9年度の実施団体募集については、次号および当財団ホームページでお知らせします。

アウトリーチの様子(Aプログラム・福島県いわき市／アーティスト：浅井信好)　©金子愛帆

●令和7年度「リージョナルシアター事業」報告

演出家等を公共ホール等に派遣し、アウトリーチやワークショップを実施するリージョナルシアター事業。令和7年度は6団体が参加し、街の規模もホールのミッションもさまざまな中でホール担当者は派遣アーティストと対話を重ねながら企画した事業を実施しました。

三重県鈴鹿市では、会館にある各施設を市民に知ってもらうとともに、その魅力を体感してほしいという会館側の希望により、館内を周遊しながら演劇作品を創作するワークショップを実施しました。小学生から80歳代まで幅広い世代が参加し、会館内のさまざまな部屋を使って参加者がチームごとに各部屋を周りながらセリフの穴埋め、配役、音響や照明、小道具などを考えて、最後に発表を行いました。参加者の満足度が高かったことと、会館職員はもちろん市内の市民劇団や近隣の大学の演劇サークルにもボランティアとして参加いただけたことで、今後の会館の事業展開に期待がもてる内容となりました。

兵庫県伊丹市では、令和9年度から音楽ホール、10年度以降文化会館が改修工事に入る予定であることから、休館中にアウトリーチを積極的に実施することを目標として事業を組み立てました。まずは財団職員がアウトリーチの意義や目的を共有するためにインリーチを実施。派遣アーティストの志賀亮史さんが小学校で行っているプログラムを実際に体験してみました。文化系施設の職員だけでなく、昆虫館やスポーツセンター、総務系の職員の参加もあり、「他施設の職員と役職など関係なく交流できた」「新任職員の研修に使っても良さそう」「今回の刺激を参考にして、企画やアウトリーチへの取り組みを頑張りたい」との声が挙がっていました。

当事業では、派遣アーティストと共に多様なプログラムを実施することを通じて、ホールや地域の抱える課題と向き合い、地域の魅力や資源を発見することができます。令和8年度は5地域で実施予定ですので、近隣地域で実施の際はぜひご視察ください。なお、9年度の参加団体の募集については、後日詳細をお知らせいたします。

鈴鹿市でのワークショップ(アーティスト：田上豊)

地域通信

●データの見方
情報は地域ブロック別に、開催地の北から順に掲載してあります。●で表示してあるのは開催地です。マークが付いている事業は地域創造の助成事業(予定)です。ラインの下は、事業運営主体、住所、電話番号、担当者名の順に記載してあります。色帯部分が事業名で、以下、内容を紹介しています。

●地域ブロック
[北海道・東北]北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
[関東]茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川
[北陸・中部]新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知
[近畿]三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
[中国・四国]鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知
[九州・沖縄]福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

●情報提供先
ファックス、電話、e-mailでお願いします。
Fax. 03-5573-4060　Tel. 03-5573-4093
letter@jafra.or.jp
芸術環境部　情報担当

●2026年6月号情報締切
4月15日(水)

●2026年6月号掲載対象情報
2026年6月～8月に開催もしくは募集されるもの

北海道・東北

●札幌市

札幌芸術の森美術館
〒005-0864　札幌市南区芸術の森2-75
Tel. 011-591-0090　川口侑莉
https://artpark.or.jp/shisetsu/sapporo-art-museum/

0さいからのげいじゅつのもり

雪の季節に子どもたちの遊び場として企画されてきた展覧会。約7年ぶりの開催となる今回は、マスを進みながら美術作品を鑑賞できる彫刻すごろくや、床に寝転がって雲を見上げる展示など、夢中になれる仕掛けが満載。さらに、大声を出せるコーナーやバランスボールで遊べるエリアも設けるなど、0歳から大人まで楽しめる空間を展開する。
[日程]1月17日～4月12日
[会場]札幌芸術の森美術館

●青森県弘前市

弘前れんが倉庫美術館
〒036-8188　弘前市吉野町2-1
Tel. 0172-32-8950　佐々木蓉子
https://www.hirosaki-moca.jp/

開館5周年記念「杉戸洋展：えりとへり／flyleaf and liner」

身近なものや自然をモチーフに作品を描く杉戸洋が制作した最新作を含む約70点を、煉瓦倉庫の空気や質感からインスピレーションを得て、“余白”に注目した展示構成で紹介する。また、コラボレーターであるデザイナーの服部一成は、展覧会の構想から携わり、杉戸の作品とともに展示される壁紙のデザインを担当。同時開催のコレクション展では、弘前市出身の奈良美智と杉戸の共作も特別出品として紹介。
[日程]2025年12月5日～5月17日
[会場]弘前れんが倉庫美術館

●宮城県塩竈市

塩竈市杉村惇美術館
〒985-0052　塩竈市本町8-1
Tel. 022-362-2555　阿部沙斗加
https://sugimurajun.shiomo.jp/

French Art Week in Miyagi 2026

仙台日仏協会アリアンス・フランセーズとの共催で、「壁の向こう側：隠された物語、共有すべき物語」をテーマに、展覧会や交流マルシェ、トークイベントなどを仙台市と塩竈市の3会場で開催する、芸術交流を通じた地域文化イベント。展覧会では、美術館が支援するアーティスト2名と、都内在住のフランス人アーティスト3名が1対1のペアを組み、対話を通じた作品展示を行う。
[日程]4月4日～12日
[会場]塩竈市杉村惇美術館、仙台日仏協会アリアンス・フランセーズ、エル・パーク仙台

関東

●群馬県高崎市

高崎芸術劇場
〒370-0841　高崎市栄町9-1
Tel. 027-321-7300　小林慧吾
https://www.takasaki-foundation.or.jp/theatre/

群馬交響楽団×高崎芸術劇場 GTシンフォニック・コンサート vol.1「うた、唄、詩、歌」～OUR SONGS～

横山だいすけと群馬交響楽団が贈る「歌」をテーマにした大人向けコンサート。昨年全日本合唱コンクール全国大会金賞を受賞した群馬大学共同教育学部付属中学校音楽部と、世代を超えて愛される名曲を披露する。2024年群響委嘱作品の『UTAGE～宴～』(山本菜摘作曲)のほか、『ひかりのみち～続く時のなかで』(小鹿紡作曲)の改定初演も予定。
[日程]4月18日
[会場]高崎芸術劇場

●さいたま市

埼玉県立近代美術館
〒330-0061　さいたま市浦和区常盤9-30-1
Tel. 048-824-0111　菊地真央
https://pref.spec.ed.jp/momas/

アーティスト・プロジェクト#2.09 江頭誠　夢見る薔薇 ～Dreaming Rose～

戦後日本で普及した花柄の毛布を用いて、独自の立体作品や展示空間を創り出すアーティスト・江頭誠の個展。江頭は多摩美術大学に在学中、実家の母から譲り受けた花柄の毛布を友人に「ダサい」とからかわれた出来事をきっかけに、卒業制作で毛布と綿から成る大阪城をモチーフとした作品を発表。以後、花柄毛布と向き合い幅広い活動を続けている。
[日程]2月7日～5月10日
[会場]埼玉県立近代美術館

●東京都大田区

大田区民プラザ
〒146-0092　大田区下丸子3-1-3
Tel. 03-3750-1614　内藤
https://www.ota-bunka.or.jp/facilities/plaza

下丸子JAZZ倶楽部 白石幸司& Swingin’Buddies

「下丸子JAZZ倶楽部」は大田区民プラザ開館以来、地元に親しまれているジャズ公演。公共ホールで長年継続されてきた取り組みとして、音楽文化に貢献したことが評され、2019年に「ミュージック・ペンクラブ音楽賞　企画賞」を受賞している。352回を迎える今回は、ジャズ・クラリネット奏者・白石幸司のバンドSwingin’Buddiesによるコンサートをお届けする。
[日程]4月16日
[会場]大田区民プラザ

●東京都目黒区

目黒区美術館
〒153-0063　目黒区目黒2-4-36

Tel. 03-3714-1201　誉田あゆみ
https://mmat.jp/

**岡田謙三
パリ・目黒・ニューヨーク**

1920年代はパリ、1950年代以降はニューヨークで創作し、目黒区自由が丘にアトリエを構えて活動した画家・岡田謙三(1902～82)。2メートルを超える大作や、友人・知人との交流が窺える写真資料など、コレクションと複数の公立美術館からの作品・資料を併せて展示し、具象から抽象的な作風へと変遷していく岡田の画業を3つの都市での経験からたどる。
[日程]2月21日～5月10日
[会場]目黒区美術館

●川崎市

川崎・しんゆり芸術祭実行委員会事務局
〒215-0004　川崎市麻生区万福寺1-12-1 クロスアベニューII 8F(川崎市文化財団内)
Tel. 044-952-5024　広瀬公美子
https://www.artericca-shinyuri.com/

**川崎・しんゆり芸術祭
「アルテリッカ2026」**

小田急新百合ケ丘駅周辺の文化施設や芸術系大学で行われる芸術祭。18回目の今回は「おいしい芸術」をテーマに、新企画「アルテリッカ・ニューサウンド・オーケストラ」の公演や、人間国宝が顔を揃える能楽、映画、市民劇など、さまざまなジャンルの45プログラムが行われ、気になる公演をビュッフェのように自由に選んで楽しめる。
[日程]4月11日～5月10日
[会場]川崎アートセンター、麻生市民館ホール、昭和音楽大学内ホール ほか

●神奈川県秦野市

秦野市立宮永岳彦記念美術館
〒257-0001　秦野市鶴巻北3-1-2
Tel. 0463-78-9100　堀栄子
https://www.city.hadano.kanagawa.jp/kanko-bunka-sports/bunka-geijutsu/1/index.html

宮永岳彦の芸術

「光と影の華麗なる世界」と評される美しい女性像を描いた洋画家・宮永岳彦(1919～87)は、油彩画だけでなく、ポスターや童画、表紙画、挿絵、水墨画など多彩な作品を残した。本展では作品を年代順に紹介し、「美しいものを描くことで社会の役に立ちたい」という願いを胸に、さまざまな作風の作品を描き続けた宮永の芸術の全容を概観する。
[日程]2025年12月13日～6月7日
[会場]秦野市立宮永岳彦記念美術館

北陸・中部

●新潟市

りゅーとぴあ　新潟市民芸術文化会館
〒951-8132　新潟市中央区一番堀通町3-2
Tel. 025-224-7000　森田雅子
https://www.ryutopia.or.jp/

**【能、源平で巡る その壱】
春の能楽鑑賞会
～牛若丸の出会い～**

字幕タブレットの貸し出しや解説を交え、初心者にも能と狂言を気軽に楽しんでもらおうと毎年行われている恒例の能楽公演。能は、宝生流二十代宗家・宝生和英がシテを務め、桜満開の鞍馬山を舞台に牛若丸と大天狗の出会いを描いた『鞍馬天狗』をお届け。子方として、新潟の子どもたちも出演する。
[日程]4月11日
[会場]りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館

●長野県伊那市

長野県伊那文化会館
〒396-0026　伊那市西町5776
Tel. 0265-73-8822　山田敦子
https://inabun.jp/

伊那ぶんぶん子どもまつり2026

ホール全館で1日中アートを楽しめる子ども向けイベント。近藤良平による日本昔ばなしを題材にしたダンス作品『かさじぞう』や『てんぐのかくれみの』が上演されるほか、口笛とウクレレの世界チャンピオンによる演奏会やアートワークショップ、館内プラネタリウムの上映、地域の子どもたちによるダンスステージ、木のおもちゃコーナーなど多彩なプログラムが目白押し。キッチンカーも出店。
[日程]4月18日
[会場]長野県伊那文化会館

昨年の様子(木曽おもちゃ美術館が出張)

●静岡県島田市

島田市民総合施設プラザおおるり
〒427-0042　島田市中央町5-1
Tel. 0547-36-7222　小林智美
https://www.machi-shima.com/plaza.html

**音楽であふれる街島田みんなで
第九を！Vol.2**

街を音楽の力で活性化しようと、小学生から大人まで年齢を問わず集まった島田市民を中心とする90人の参加者によるコンサート。昨年に続き2回目となる今回は、9月から16回の練習を重ねてつくり上げた、2台ピアノの伴奏によるベートーヴェン「歓喜の歌」のほか、全5曲の合唱を披露する。
[日程]4月26日
[会場]島田市民総合施設プラザおおるり

●愛知県瀬戸市

愛知県陶磁美術館
〒489-0965 瀬戸市南山口町234
Tel. 0561-84-7474　田畑・大槻
https://www.pref.aichi.jp/touji/index.html

茶の饗宴―和洋茶器くらべ

日本の茶の湯・煎茶、西洋のティーカルチャーにおける茶器を通して、その美意識や茶文化を比較できる展覧会。新収蔵品である一宮の繊維商で近代の数寄者(茶人)である森家の煎茶道具を公開するほか、19～20世紀のヨーロッパのティーセットなど、コレクションを中心に展示する。プラトンの『饗宴』にちなみ、対話をするように和洋それぞれの特徴や楽しみを紹介する。
[日程]3月20日～5月17日
[会場]愛知県陶磁美術館

近畿

●京都市

京都府立府民ホール アルティ
〒602-0912　京都市上京区龍前町590-1
Tel. 075-441-1414　碓井智恵
https://www.alti.org/

**～ALTI若手音楽家シリーズ～
深見まどかピアノリサイタル**

京都ゆかりの若手音楽家にスポットを当てるシリーズ。第2回は京都出身でフランスと日本を拠点に活躍するピアニスト・深見まどかが登場。彼女が敬愛する現代音楽家・武満徹の没後30周年に捧げるプログラムとして、武満のピアノ作品全曲や好んで弾いたショパン、そして作曲家・酒井健治が武満への敬意を込めて今回のために書き下ろした新作も披露される。
[日程]4月25日
[会場]京都府立府民ホール アルティ

●京都市

京都市京セラ美術館
〒606-8344　京都市左京区岡崎円勝寺町124

▼—今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

Tel. 075-771-4334　廣海佳子
https://kyotocity-kyocera.museum/

特別展 日本画アヴァンギャルド KYOTO 1948-1970

1940年代以降に結成された創造美術、パンリアル美術協会、ケラ美術協会という3つの美術団体を軸に、日本画の枠組みを問い直し、新たな表現を模索した気鋭の画家たちとその軌跡を紹介。現代日本画を語る上で欠かすことのできない上村松篁や堂本印象、秋野不矩らの作品を展示。既成の日本画概念を覆す、自由で挑戦的な表現に注目する。
[日程]2月7日～5月6日
[会場]京都市京セラ美術館

●大阪府茨木市
茨木市文化振興財団
〒567-0888　茨木市駅前4-6-16
Tel. 072-625-3055　上田久美子
https://www.ibabun.jp/

惑星共鳴装置—ダンボールの穴から覗く世界—ダンボル×アンチボ

出演者が自ら制作したお面をまとい、音・光・身体が呼応しながら世界を立ち上げるライブパフォーマンス。東野祥子の演出で、20人以上のワークショップ参加者が、パフォーマー集団ANTIBODIES Collectiveと共に舞台に挑む。ダンボールお面作家・井上嘉和の造形と身体表現が融合し、視覚的にも強烈なステージが展開される。
[日程]4月18日
[会場]茨木クリエイトセンター

お面の製作風景　©井上嘉和

●兵庫県西宮市
兵庫県立芸術文化センター
〒663-8204 西宮市高松町2-22
Tel. 0798-68-0223　大歳麻衣子
https://www1.gcenter-hyogo.jp/

春休み PAC子どものためのオーケストラ・コンサート

PACレジデント・コンダクターの岩村力と贈る、3歳から楽しめるコンサート。PAC(兵庫芸術文化センター管弦楽団)は、世界各地の若手演奏家が集い研鑽するアカデミー要素のあるオーケストラ。今回は金管楽器が活躍する華やかなプログラムを予定。ほかにも、エリック・ミヤシロを迎えての映画音楽を聴いた後、来場者も一緒に『エーデルワイス』を演奏する。
[日程]4月4日
[会場]兵庫県立芸術文化センターKOBELCO 大ホール

●兵庫県宝塚市
宝塚市立文化芸術センター
〒665-0844　宝塚市武庫川町7-64
Tel. 0797-62-6800　南出みゆき
https://takarazuka-arts-center.jp/

みんなでつくる宝塚コドモ博

宝塚ファミリーランドの閉園から23年、跡地に出来た「たからば」で開かれる、ファミリーランドの記憶と未来を繋ぐ博覧会。当時の写真や資料を展示するとともに、いらなくなったおもちゃで美術家・藤浩志が制作した恐竜や動物を紹介。会場内の材料で創作できる「創造ラボ」も設けられ、子どもも大人も新たな想像力に出会える。
[日程]2月20日～4月12日
[会場]宝塚市立文化芸術センター(たからば)

中国・四国

●広島市
広島市現代美術館
〒732-0815　広島市南区比治山公園1-1
Tel. 082-264-1121　清水和音
https://www.hiroshima-moca.jp/

エイドリアン・バーグ:無限の庭園

英国の画家エイドリアン・バーグ(1929～2011)は、一貫して風景画を追求し、特に自身がアトリエを構えたロンドン北部のリージェンツ・パークを繰り返し描いたことで知られる。キャンバスに複数の空間表現や異なる時間軸を織り込む独自のスタイルは、その後、英国各地の庭園や旅先の風景へと主題が広がる過程でさらなる展開を見せた。本展は、約50年に及ぶ画業を関連資料を交えて紹介する。
[日程]1月24日～4月12日
[会場]広島市現代美術館

●愛媛県久万高原町
町立久万美術館
〒791-1205　上浮穴郡久万高原町菅生2番耕地1442-7
Tel. 0892-21-2881　品川ちひろ
https://www.kumakogen.jp/site/muse/

2025年度久万美コレクション展 WALKS　歩くこと

芸術家たちにとって“歩く”という行為はどのような意味をもつのか、面河渓に魅せられた古茂田公雄や山頂を目指した畦地梅太郎、青木ヶ原樹海を行く斎藤和雄など、コレクションを元に芸術家と“歩くこと”の関係性を考える展覧会。また、小特集「酔を求めて、飲み“歩く”」では、新たに収蔵した作品も紹介。関連事業として春の植物観察会なども行われる。
[日程]2025年12月20日～4月19日
[会場]町立久万美術館

九州・沖縄

●福岡県直方市
直方谷尾美術館
〒822-0017　直方市殿町10-35
Tel. 0949-22-0038　櫻庭理菜
https://yumenity.com/nogata-tanio-art-museum/

子どものための美術館21×切り絵クリエイターKEN もぐもぐ四季ねこ展

公募で集まった小学4～6年生13人の「子どもスタッフ」が約半年の活動で企画した展覧会。直方市在住の小学生切り絵クリエイターKENの作品をテーマごとに展示するほか、ギャラリートークやサイン会も開催。また、手づくりのフォトスポットや作品制作に参加できる「ひかりの街」など、大人も子どもも楽しめる体験型の仕掛けが満載。
[日程]2月20日～4月5日
[会場]直方谷尾美術館

展示会場の模型を使って、展覧会について話し合う子どもスタッフたち

●熊本市
熊本市現代美術館
〒860-0845　熊本市中央区上通町2-3　ぴぷれす熊日会館3F
Tel. 096-278-7500　冨澤治子
https://www.camk.jp/

秀島由己男展　ダークファンタジー/ミステリアス　水俣が生んだ異才

熊本県水俣市出身で戦後日本版画の重要作家のひとり、秀島由己男(1934～2018)の大回顧展。未整理であった2,200を超える作品、資料、そして自己研鑽のため収集していた美術・工芸コレクションの数々を、最後の居住地であった和水町と熊本市現代美術館が5年間にわたって調査。画業の全貌を、260点超の出品点数で振り返る。
[日程]4月18日～6月21日
[会場]熊本市現代美術館

＊地域創造レターは再生紙を使用しています

滋賀県東近江市
東近江創作ミュージカル2025『木地師のふるさと東近江～惟喬親王伝説～』

写真提供：東近江市地域振興事業団

●東近江創作ミュージカル2025『惟喬親王伝説～木地師のふるさと東近江～』
[主催] 滋賀県、(公財)びわ湖芸術文化財団、(公財)東近江市地域振興事業団
[会期] 2026年1月31日、2月1日
[会場] 八日市文化芸術会館
[演出・脚本] 中村暁(宝塚歌劇団演出家)
[振付] 村川知佐
[音楽] 大町達人
※鑑賞サポートとして台本貸出、字幕タブレット、ヒアリングループ席などを準備。
※当財団助成事業

●東近江市立八日市文化芸術会館
2005年2月に1市4町が合併して誕生した東近江市が06年4月に滋賀県から移管された旧滋賀県立八日市文化芸術会館(1981年開館)。804席のホールと展示室、練習室等を有す。指定管理者は財団法人東近江市地域振興事業団(12年に公益財団法人化)。びわ湖のある滋賀県では地理的に移動が難しいことから、湖を囲む5地区に同会館を含む県立の芸術会館5施設を整備し、滋賀県文化振興事業団が運営。県の公の施設の見直しにより06年度から立地市に順次移管(草津文化芸術会館のみしが県民芸術創造館として継続したが、15年度に草津市に移管)。なお17年には公益財団法人滋賀県文化振興事業団と公益財団法人びわ湖ホールの再編により、公益財団法人びわ湖芸術文化財団設立。

＊1 1998年4月号「今月のレポート」参照

＊2 1957年生まれ。滋賀県文化振興事業団の職員として八日市文化芸術会館、しが県立芸術創造館、滋賀県立文化産業交流会館を担当。2015年に草津クレアホール(旧しが県民芸術創造館)のプロデューサーに就任し、草津歌劇団を立ち上げ。19年に八日市文化芸術会館副館長に就任。館長を経て、舞台芸術専門職員。

小学4年生から78歳まで38人の市民が出演した東近江創作ミュージカル『木地師のふるさと東近江～惟喬親王伝説～』が1月31日、2月1日に東近江市立八日市文化芸術会館で上演された。脚本・演出、作曲、振付はプロだが、美術・衣裳の製作をはじめ裏方の多くを市民スタッフが担い、チケット完売の大盛況だった。

題材は、平安時代、東近江で隠遁生活を送った惟喬親王。都を追われた経緯と、惟喬がろくろを使用する木工技術を考案し、職人(木地師)たちが宮廷の保護により木の伐採権を得るまでを描く。都を牛耳っていた藤原良房、彼に恋人との仲を裂かれた惟喬の友・業平、良房に帝として担がれた惟喬の弟・惟仁が登場し、キャラクターのテーマ曲にのせてアクション満載の平安ドラマが展開した。

●

私が東近江創作ミュージカルを初めて取材したのは1998年3月(*1)。東近江市は合併前の八日市市、八日市文化芸術会館は市に移管される前の滋賀県の施設、運営は指定管理者制度が導入される前の滋賀県文化振興事業団(以下、事業団。現在は公益財団法人びわ湖芸術文化財団に統合)だった。これを説明するだけで、この間にどれほど環境が変わったかがわかる。にもかかわらず、なぜ東近江創作ミュージカルは継続できたのか？ その疑問をもって現地に向かった。

開場前から観客が大行列をつくり、衣裳を着けた子どもたちが行列前でウェルカムソングを披露。パンフレットには地元企業37社の広告、ミュージカルナンバーの全歌詞、用語説明、人物相関図などを掲載。語り手が木地師について説明するオープニングに始まり、ミュージカルを見慣れない人にもわかるような場面転換のナレーションなど、みんなでつくるだけでなく、みんなで楽しむところまで意識する制作姿勢は変わっていなかった。

98年以来、1作を除いてすべての脚本・演出を担当してきた宝塚歌劇団演出家の中村暁さんは、地元に馴染みのある話題を元にしているところがここの強みだと言う。「土日しか稽古できないし、全員揃わないし、代役もその日できる人が入る。それでもやるという情熱があるから続いている。知らない人同士が稽古しながら繋がりを深めているのがよくわかる」。

この事業を立ち上げたのは、事業団の職員で当時は技術スタッフだった端洋一さんだ(*2)。「チケットを売るだけが文化振興ではない。市民と一緒に何かやれないだろうか」と手づくりの創作ミュージカルを企画し、96年に初挑戦。98年3月に東近江創作ミュージカルとして『Legend―湖の伝説』を発表した。しかし、合併市への施設移管で端さんが異動し、04年3月に上演した『給食物語』を最後に中断。副館長として会館に戻ったのは19年で、貸館のみになっていたのを立て直し、22年9月の新作『日出ずる国 厩戸皇子』で再出発した。

端さんは、「当初から市民スタッフを育成するのが目的だった。このチームがあるから実現できている。そこに行けば自分の居場所がある、そういう環境を具体化する場が私にとっては市民ミュージカルだ。公立ホールは市民と一緒に創造する文化芸術の拠点であるべきで、24年には合併で活動休止した市民吹奏楽団も復活した」と揺るぎない。

市民スタッフの村川幸美さん(1959年生まれ)は、「娘が96年の舞台に出演したのがきっかけで『Legend』から裏方をやっている。みんなが輝いていくのを見るのがすごく楽しい。普通の生活をしていたら絶対に味わえない、非日常の世界、ワクワク感がたまらない」と言う。今回、振付を担当したのはプロの振付家になった娘の知佐さんだ。もともと県立施設だったため、市民スタッフたちは県域から参加していて、この距離感も心地いいと言う。

インタビューしていると、「この人も親子で頑張ってる。娘さんは『Legend』の主役」「この人は良房を演じた隣町の副町長」と次々に古参メンバーが集まってきた。「一人の人間として見てもらえて、活性化する」「こうやれとは言われなくて、衣裳も道具も自分たちのアイデアを聞いてもらえる」「昔の部活みたい」など、仲間たちの熱い思いが溢れていた。 (坪池栄子)